「地域学」としての池袋学をつくるために

阿部　治

「池袋学」は、東京芸術劇場と立教大学の連携講座として、二〇一四年度に始まった。当初は三年で一区切りをつける予定であり、そうすると二〇一六年度が最終年度ということになる。その最後の年に私は奇しくも座長の任を引き受け、どのようにこの講座を締めくくったものかと考えた。

幸いなことに、といっていいと思うが、劇場や大学の内外、地域から「池袋学」の存続を求める声が上がり、結果的にもう一年、講座を延長することになった。私自身、三年間にわたって行ってきた「池袋学」を〈やりっぱなし〉のように終えることに、いささか躊躇いもあった。三年間の活動や成果を整理し、総括していく必要がある。そこで、二〇一七年度は総括の年とし、東京芸術劇場と立教大学がそれぞれに企画を考え、さらに「池袋学」の初代座長である渡辺憲司氏が現在勤務されている自由学園との連携による講座を加えて、池袋にとどまらないテーマや、範囲をひろげた地域学の可能性を問うラインナップを掲げた。

とくに二〇一七年末には、先行して東京の副都心を扱ってきた「新宿学」と「渋谷学」を代表する方々をお招きし、シンポジウムを開催した。それぞれが誕生した経緯、これまでの活動、現状や課題、今後の展望などに関する報告や討議は、学ぶことの多い貴重な機会であった。

二〇一四年度からの「池袋学」は、今年度で本当に一区切りとなる。今後の予定や展開は文字どおり未定だが、立教大学では、池袋を対象とする授業も始まっており、大学教育の中にこうした問題をいかに位置づけていくかが中心的課題となるだろう。また東京芸術劇場との連携事業としての「池袋学」についても新たな方策が求められるに違いない。

昨年度の講演録の巻頭言に、私はこんなことを書いている。

もしも今後の展開を考えるとしたら、やはり「地域学」として池袋学をつくっていくための視点を、もう一回整理することが必要だろう。たとえば、座学的な講演と同時に、フィールドワークによって地域に根ざした人の話を聞き、様々な場所に足を運ぶ。そして現在の池袋の動きやダイナミズムを知る。そこで蓄積されるデータを残す際には、インターネットを通じてリアルタイムで情報の共有も可能である。豊島区郷土資料館などと協働し、リソースとなる資料とどう向き合っていくのかについても共に考えてみたい。

前年度と同じことをくり返すのも気が引けるが、一年前に考えていた展開とはいえ、実践するには時間を要する。右のような目標を常に頭の片隅に置きながら、池袋と向きあっていかなければならないだろう。

（あべ・おさむ　立教大学社会学部教授、同ＥＳＤ研究所所長、「池袋学」座長）